



宮司プレス第四百十一号

彦島八幡宮 宮司 ニュース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 平成三十一年 一月二十四日

◇宮司の柴田です。今年初めての宮司プレスの発行です。 昨年は、十一号しか発行できませんでした。 今回も、若干、発行までに日数を要(よう)しましたが、毎月発行が大前提(だいぜんてい)ですから、幸先(きさき)のよいスタートであります。 今年こそは、「宮司プレス」ならぬ、「宮司エクスプレス」、高速特急の発行、月一回の発行を継続し、勢い(せい)にのって、月二回の発行を重ねつつ、さらに、夢(ゆめ)のような月三回発行の奇跡(きせき)を起し、遅れ(おそ)の累積(るいせき)を減(へ)らしたいものです。 平成十八年六月から毎月一回の発行を心掛けた宮司プレス、本来(もと)であるならば、今月(こんげつ)で百五十二号(ひゃくごじゅうにごう)のはずでありますから、遅れ(おそ)の累積(るいせき)は、十一月(じゅういちがつ)、毎月発行への軌道修正(きだうしゆしゆ)の道(みち)のりは、ますます険(けわ)しさを増(ま)しています。 発行の遅れ(おそ)の累積(るいせき)、さらに、今後の発行計画(けいけい)の所信(しよしん)を披露(ひろう)しつつ、お待たせしました、遅ればせながらと記述(きじゆつ)するものが、悪(わる)しきルーティン(るーていん)となっておりますが、第百四十一号(ひゃくしゅういちごう)の発行です。

◇毎年、その年の干支(えと)にちなんだ「書

初め(はつめ)をしておりまして、新年(しんねん)の安全祈願祭(あんぜんきげんさい)等の会社関係(かいしゃかんけい)の方々(かたがた)へお頒(わか)ちしておられます。 平成二十六年(しんせい)の午年(うまどし)から始めて、今年(ことし)で、六回目(むくも)です。 ちなみに、これまでの書初め(はつめ)は、午年(うま)が、「つじどし」が、「致祥(しじやう)」「吉祥(きしやう)」、申年(さるどし)が、「共伸(きしん)」「神喜(しんき)」、酉年(とりどし)が、「尊神(そんじん)」「尊徳(そんとく)」、戌年(いぬどし)が、「天成(てんせい)」「直誠(ちくせい)」、でした。

◇前号(ぜんごう)の第四百十号(だいしゅうじゅうごごう)に詳述(しょうじゆつ)しました。 今年(ことし)は、「己亥(つちのとい)」の年(とし)です。 全部(ぜんぶ)で六十通(ろくじゅう)りある干支(えと)の三十六番(さんじゅうろくばん)目の干支(えと)です。 己(こ)は、陰(いん)の土(つち)を表(あらわ)し、田(いり)や畑(はたけ)の土(つち)のことです。 もともとは、紀(き)の意(い)味(み)が語源(ごごげん)です。 物が形(かたち)を曲(ま)げて、縮(ちぢ)まった形(かたち)であります。 縦糸(たていと)と横糸(よこいと)で表(あらわ)されておいて、「筋道(すじみち)を通(とお)す」ことを意味(いみ)しています。 亥(がい)は、閑(がい)という意味(いみ)が語源(ごごげん)です。 干支(えと)の漢字(かんじ)は、何(いづ)れも草木(くさき)の成長(せいじやう)の様子(ようす)、現在(げんざい)、どの

ような状態(じょうたい)であるかを一文字(ひともじ)で表(あらわ)しています。 「己(こ)」は、草木(くさき)が十分(じゅうぶん)に繁茂(はんも)して盛大(せいだい)となり、しかも、筋道(すじみち)が正(ただ)しくととのった状態(じょうたい)、つまりは、成長(せいじやう)の絶頂期(ぜつちやうき)を迎(むか)えていて、しかも、はつきりとした姿(すがた)を現(あらわ)しているのです。 いよいよ、本年(ことし)五月(ごがつ)に改元(かいげん)を迎(むか)えるわけですが、新しい時代(じだい)の幕明(まくあ)けに相応(ふさわ)しい縁起(えんぎ)のいい干支(えと)ではないかと考え(かんが)えます。 「亥(がい)」は、「己(こ)」のま(ま)ったく逆(さか)の様子(ようす)を意味(いみ)しています。 草木(くさき)が枯(か)れてしま(しま)っています。 が、しかしながら、次の生命(せいめい)力の原動力(げんどうりき)となる強い力(ちから)が、閉じ込め(とじこめ)られている、蓄(たくわ)えられている状態(じょうたい)を表(あらわ)しています。 今年(ことし)の干支(えと)は、「猪(いのしし)」が当て(あ)てられています。 猪(いのしし)の習性(しゅうせい)を皆(みな)様(さま)、ご存知(ぞんち)ですか。 猪(いのしし)は、自分の背(せ)中(ちゆう)を樹木(じゆもく)の幹(みき)等にこすりつけ、樹液(じゆえき)をた(た)つぷりと塗(ぬ)り込(こ)みます。 さらに、地面(じめん)に寝転(ねころ)び、その樹液(じゆえき)のた(た)つぷりついた背(せ)中に砂(すな)を付着(ふちやく)させます。 何回(なんど)も繰り返(くりか)すことにより、「鏝(よろい)」のように背(せ)中(ちゆう)をつくる習性(しゅうせい)がある(あ)るそうです。 「亥(がい)」は、固(かた)い背(せ)中(ちゆう)、矢(や)も立た(た)なくなる(な)るような固(かた)まる」と言(い)われる由縁(ゆえん)な(な)のでし

ようか。「猪突猛進(ちよとつもうしん)」、猪は、何も考えずに、無鉄砲(むてつぱう)に突き進むだけかと、正直、軽蔑(けいべつ)をしていました。しかしながら、備えを万全(ばんぜん)にして、突っ走っていたわけで、今さらながら、感服(かんぷく)しています。前にも述べましたが、「己亥」の年は、力のみなきつている、エネルギーに満ち溢れている年まわり、「猪突猛進」といきたいところですが、猪の習性にあやかり、「準備万端(じゅんびばんたん)」を整えた上で物事を進めていきたいものです。

◇中国から伝わったとされる干支の漢字が難解(なんかい)だったので、それぞれの干支に動物が配されたそうです。「亥」には、「猪(いのしし)」が配されました。「亥」や「己」を使った熟語、かなり苦慮(くりよ)しました。今年(ことし)は、「刻真(こくしん)」と「己道(きどう)」と浄書(じようしよ)しました。何(いづ)れも、私の造語(ぞうご)です。



◇「刻真」は、「刻(こく)」の字に、「亥(い)」

の字が入っています。日々の真心込めた生活、その時を刻(きざ)むことが、「真(まこと)」の花を咲かせて欲しいという願いを込めて浄書(じようしよ)しました。「己道」の「己」は、前述したように、筋道の通ったという意味があります。ある人が、「己道とは、我が道を行くということか」と納得されていましたが、我が道は我が道でも、道理にかなった生き方で、正しい道という意味です。今回は、それぞれ、二百枚、お宮のオフセット印刷機(輪転機)で、印刷しました。さらに、その造語の詳しい説明文も浄書(じようしよ)しています。「神道というは人々日用の間にあり」といわれます。折り目正しく、筋道の通った日々の暮らしこそ「己道」で、その暮らしは、「真心(まごころ)」を刻(きざ)む道(みち)でもあり、「刻真」で、まさに、神社神道の真髓(しんずい)でもあり、「真(まこと)の花」を咲かせて欲しいという願いを込めて浄書(じようしよ)しました。「意(い)」のあるところをおくみとりください。「自愛をお祈り申し上げます。

◇十二月の祭典行事報告

▼月次祭 \*十二月一日、十五日

▼大注連縄おろし \*十二月二日

▼海士郷恵比須神社祈漁祭

\*十二月三日

▼朝粥会

\*十二月二十一日

▼天長祭 \*十二月二十三日

▼田の首八幡宮大注連縄おろし

\*十二月二十三日

▼正月臨時巫女説明会

\*十二月二十三日

▼下関西ロータリークラブ奉納例会にて参拝

\*十二月二十六日

▼貴布禰神社迎春準備

\*十二月三十日

▼大祓式、除夜祭、守札等清祓式

\*十二月三十一日

◇十二月の宮司の行事会議等活動報告

▼八幡宮関係団体

◇維蘇志会十二月例会(忘年会)

\*十二月八日

▼下関西ロータリークラブ

◇例会(奉納例会、当宮参拝)

\*十二月二十六日

▼その他

◇歳末会社関係挨拶回り

\*十二月十日、十七日

◇下関三井化学忘年会

\*十二月十一日

◇彦島製鍊忘年会

\*十二月十三日

◇迫町自治会役員会

\*十二月十九日